

二〇一九年四月一七日(参加者二〇名)

右手の池左手の池と落花舞ふ	うつぎ	茶室へと若葉影踏む小径かな	たか子
溪流のどの石となく落花積む	うつぎ	ようこそと山湖に舞へる揚羽蝶	たか子
池日永亀は万年生くるてふ	うつぎ	池ほとりに一人たたづみ春惜しむ	はく子
仰ぎては枝垂れ桜の内へ外へ	うつぎ	山つつじ左右に綴りし山路かな	はく子
落椿残念石に侍りけり	うつぎ	山つつじトンネル抜けて湖へ出づ	宏 虎
つくばひの花屑どこか所在なげ	明日香	囀や蒼き空から降るごとし	宏 虎
池の面カンバスにして山つつじ	明日香	吟行子花見に浮かれ句を詠まず	芳 舟
ゆく道の前後左右に山つつじ	明日香	水亭に雅楽の洩るる花の昼	芳 舟
草引女一尺ほどを小半時	明日香	花の昼夫と二人のティータイム	もと子
花万朶像の天使の翳す手に	満 天	青空へ尖る飛簷や竹の秋	もと子
木洩れ日の山路明るき山つつじ	満 天	花虻の協奏曲や植物園	こすもす
風吹けば何々大笑のチューリップ	満 天	沢音と若葉影浴ぶ至福かな	小 袖
散る桜吾の句帳にとどまらず	満 天	ケセラセラ蒲公英の絮旅立ちぬ	素 秀
広芝に万朶を翳す大桜	わかば	吹く風によれつ解かれつ糸桜	ぼんこ
真青なる空へ五彩の芽木高し	わかば	み仏の全面に座し春憂ふ	有 香
青空の透ける大樹の若楓	わかば	ナナハンの轍一筋花堤	よう子
芽木の風風速計はと見かう見	せいじ	花人の杖の一步に桜散る	よし子
奥池へ岨道たどる山つつじ	せいじ		

定例句会みのる選

二〇一九年四月一七日（参加者二〇名）